

小林躋造

こばやし・せいぞう

海軍大将、勲一等瑞宝章

経歴

生:明治10年(1877年)10月1日、広島市台屋町3番地(現南区京橋町)生まれ

没:昭和37年(1962年)7月4日、東京世田谷区の自宅において逝去、享年84歳、東京都府中市多磨墓地に葬る

—	—	旧広島藩士族小林時之助の養子となる
明治23年(1890年)	12歳	御調郡尾道高等小学校修了
明治23年(1890年)9月1日	12歳	尋常中学福山誠之館へ入学
明治26年(1893年)3月29日	15歳	尋常中学福山誠之館を退学
—	—	海軍予備校「海城中学校」に入学
明治29年(1896年)2月5日	18歳	海軍兵学校に第26期生として入学
明治31年(1898年)12月13日	21歳	海軍少尉候補生 海軍兵学校を優等で卒業 砲艦「比叡(初代)」乗組
明治31年(1898年)12月14日～ 明治32年(1899年)8月28日	21歳	練習艦隊遠洋航海<エキスマルト(カナダ・ブリティッシュコロ ンビア州)ーシアトルータコマーマア・アイランドーサンフラ ンシスコーサンチャゴーハワイ>
明治32年(1899年)9月2日	21歳	戦艦「富士」乗組
明治33年(1900年)1月12日	22歳	海軍少尉
明治33年(1900年)8月1日	22歳	戦艦「初瀬」回航委員
明治34年(1901年)2月22日	23歳	イギリス発
明治34年(1901年)4月15日	23歳	帰朝
明治34年(1901年)5月4日～ 8月6日	23歳	横須賀鎮守府附軍法会議判事
明治34年(1901年)8月30日	23歳	砲艦「金剛」乗組
明治34年(1901年)9月5日～ 10月8日	23～ 24歳	呉鎮守府附軍法会議判事
明治34年(1901年)10月1日	24歳	海軍中尉

明治35年(1902年)5月20日	24歳	艦隊附軍法会議判事
明治35年(1902年)9月10日	24歳	横須賀水雷団水雷敷設隊分隊長心得
明治35年(1902年)9月16日～ 明治35年(1902年)12月11日	24～ 25歳	横須賀鎮守府附軍法会議判事
明治35年(1902年)12月6日	25歳	2等巡洋艦「浪速」砲術長心得兼分隊長心得
明治36年(1903年)9月26日	26歳	海軍大尉 2等巡洋艦「浪速」砲術長兼分隊長
明治38年(1905年)1月27日	28歳	第3艦隊司令部参謀
明治38年(1905年)6月14日	28歳	第4艦隊司令部参謀
明治38年(1905年)12月20日	29歳	南清艦隊司令部参謀
明治39年(1906年)1月25日	29歳	2等巡洋艦「巖島」砲術長
明治39年(1906年)8月30日	29歳	佐世保鎮守府司令部参謀兼司令長官副官
明治40年(1907年)4月5日	30歳	海軍大学校甲種第5期入校
明治41年(1908年)9月25日	31歳	海軍少佐
明治42年(1909年)5月25日	32歳	海軍大学校甲種首席卒業
明治42年(1909年)5月27日	32歳	戦艦「石見」砲術長
明治42年(1909年)12月1日	33歳	海軍省軍務局無線電信調査委員
明治42年(1909年)12月13日	33歳	兼教育本部課員
明治43年(1910年)3月1日	33歳	海軍省先任副官兼海軍大臣秘書官兼軍事参事官副官
明治44年(1911年)7月15日	34歳	在イギリス日本大使館附海軍駐在武官補佐官
大正2年(1913年)1月27日	36歳	在アメリカ日本大使館附海軍駐在武官補佐官
大正2年(1913年)9月6日	36歳	帰朝
大正2年(1913年)12月1日	37歳	海軍中佐 装甲巡洋艦「磐手」副長
大正3年(1914年)11月8日	38歳	海軍省教育本部
大正3年(1914年)11月11日	38歳	海軍大学校教官
大正4年(1915年)9月8日	38歳	海軍省艦政本部
大正4年(1915年)10月1日	39歳	海軍省技術本部副官兼臨時建築部員
大正5年(1916年)12月1日	40歳	2等巡洋艦「平戸」艦長心得
大正6年(1917年)4月1日	40歳	海軍大佐 2等巡洋艦「平戸」艦長
大正6年(1917年)12月1日	41歳	海軍省先任副官
大正9年(1920年)4月1日	43歳	在イギリス日本大使館附海軍駐在武官兼造船兵監督長
大正11年(1922年)6月1日	45歳	海軍少将

大正11年(1922年)6月10日	45歳	帰朝
大正11年(1922年)12月1日	46歳	第3戦隊司令官
大正12年(1923年)12月1日	47歳	海軍省軍務局長兼将官会議議員
大正13年(1924年)2月1日	47歳	兼臨時航空会議議長
大正15年(1926年)12月1日	50歳	海軍中将
昭和2年(1927年)3月25日	50歳	海軍省
昭和2年(1927年)4月15日	50歳	ジュネーブ海軍軍縮会議全権随員
昭和2年(1927年)9月28日	50歳	帰朝
昭和3年(1928年)1月15日	51歳	練習艦隊司令官
昭和3年(1928年)4月23日～ 昭和3年(1928年)10月3日	51～ 52歳	練習艦隊遠洋航海(上海－基隆(台湾)－馬公(台湾)－マニラ－シンガポール－バタビア(=ジャカルタ)－フリーマントル(西オーストラリア)－アデレード－メルボルン－ホバート(タスマニア)－シドニー－ウェリントン－オークランド－スバ(フィジー)－ホノルル－ヤルート(マーシャル諸島)－チラック(=トラック)－パラオ)
昭和4年(1929年)2月1日	52歳	海軍省艦政本部長兼将官会議議員
昭和5年(1930年)6月10日	53歳	海軍次官
昭和6年(1931年)12月1日	54歳	連合艦隊指令長官兼第1艦隊司令長官
昭和7年(1932年)3月14日	54歳	勲一等瑞宝章
昭和8年(1933年)3月1日	55歳	海軍大将
昭和8年(1933年)11月15日	56歳	軍事参議官
昭和11年(1936年)3月28日	58歳	待命
昭和11年(1936年)3月30日	58歳	予備役
昭和11年(1936年)9月2日～ 昭和15年(1940年)11月27日	58～ 63歳	台湾総督(第17代)
昭和17年(1942年)2月21日	64歳	大東亜建設審議会委員
—	—	翼賛会中央協力会議議長
昭和19年(1944年)8月	66歳	翼賛会総裁
昭和19年(1944年)8月28日～ 昭和21年(1945年)2月22日	66～ 68歳	勅撰貴族院議員
昭和19年(1944年)12月19日～ 昭和20年(1945年)3月1日	67歳	小磯内閣の国务大臣(無任所)
昭和20年(1945年)12月2日	68歳	戦争犯罪容疑で身柄拘束
昭和20年(1945年)12月12日	68歳	身柄釈放

生い立ちと学業、業績

小林氏は、明治10年(1877年)10月1日、広島市台屋町3番邸(現南区京橋町)で、早川亀太郎の三男として生まれ、のち、母方の旧広島藩士族小林時之助の養子となった。

広島市出身の加藤友三郎元帥・内閣総理大臣の甥。

弟は早川幹夫中将、義弟(妹の夫)は新見政一中将。

「躋造」をもじって「躋造(へそぞう)」と愛称された。

養父は広島県庁土木技師であり、当時尾道町久保273番邸に住んでいたため、躋造は御調郡尾道高等小学校修了後、明治23年(1890)年9月1日、尋常中学福山誠之館へ入学した。

若井遜・川又茁、二教師の解任を阻止するため、各学年生徒が集団で退館願を提出するという事件がおこったのは、彼が3年生在学中のことである。

この騒動は、生徒の願書を却下して一応納まったが、小林はこれを機に退学している。

退学を命ぜられたのか、退館願を出した自分の言動に責任をとってみずから退いたのかは不明であるが、恐らく後者であったと思われる。

学籍簿には「明治廿六年(1893年)三月廿九日 家事都合」と記載されている。

上京して海軍予備校「海城中学校」に入り、明治29年(1896年)2月5日、海軍兵学校に第26期生として入学した。

明治31年(1898年)12月、優等で卒業。

明治33年(1900)年1月、海軍少尉に任官した。

以後、海上勤務、日露戦争従軍、駐英駐米武官、第一次大戦従軍、海軍次官を経て、昭和6年(1931年)12月1日海軍軍人の最高位・連合艦隊司令長官に任命され、在任中海軍大將に昇進した<昭和8年(1933年)3月>。

この間、ジュネーブ海軍軍縮会議の全権随員として派遣され、会議は決裂したが、その政治的手腕は高く評価された。

また昭和4・5年(1929・30年)のロンドン海軍軍縮会議では、軍政系統の条約派として、条約の締結に努力している。

その後、二・二六事件後の昭和11年(1936年)3月30日、予備役に編入されたが、同昭和11年(1936年)9月には、第17代台湾総督に任ぜられ、昭和15年(1940年)11月まで、4年間その職にあった。

氏は、艦隊派に対して、「支那事変の收拾、日米戦の回避」という考えをもつ、いわゆる条約派の軍人であり、太平洋戦争突入後は、早期終戦の意見をもちつづけ、その関係から近衛文麿総理の知己を得、昭和18年(1943年)から昭和19年(1944年)頃には、東条首相退陣後の総理候補に擬せられていたが、諸種の事情から実現しなかった。

一方昭和15年(1940年)、近衛首相によって創り出された大政翼賛会は、次第に国策協力・国民統制の度合いを強めていたが、昭和18年(1943年)6月、前警視総監丸山鶴吉<明治35年(1902年)3月卒業>を事務総長に迎えた。

丸山は、かねてから親交のあった小林を説得して、翼賛会中央協力会議議長就任を受諾さ

せた。

この2人は、いずれも翼賛会の性格には疑問をいただいていたということであるが、太平洋戦争の終末期において、本校出身の先輩後輩の2人が、手を携えて難局の收拾にあたったという事実は、後人をして深い因縁を感じさせるものがある。

つづいて氏は、昭和19年(1944年)8月、翼賛会総裁、同昭和19年(1944年)12月、小磯内閣の無任所大臣となって入閣したが、昭和20年(1945年)3月、4カ月で辞任した。昭和37年(1962年)7月4日、東京世田谷区の自宅において逝去。享年84歳であった。
(出典1)

誠之館所蔵品

管理No.	氏名	名称	制作／発行	日付
02153	伊藤隆・野村実 編	『海軍大将小林躋造覚書』	山川出版社	1981年

出典1:『誠之館百三十年史(上巻)』、596頁、福山誠之館同窓会編刊、昭和63年12月1日

出典2:『海軍大将小林躋造覚書』、伊藤隆・野村実編、山川出版社刊、1981年1月20日

2004年10月21日更新●2005年2月16日更新:見出し・出典●2005年5月12日更新:本文●2006年6月7日更新:タイトル●2006年12月7日更新:レイアウト●2008年1月30日更新:経歴・本文●2008年10月2日更新:経歴・本文●2008年10月3日更新:経歴●